「海外に子ども用車椅子を届けよう！」
ミャンマー　プロジェクト
活動報告書

The Volunteers Group
to Send Wheelchairs
to Overseas Children
JAPAN

2017 年度 4 月～2017 年 3 月

相模女子大学　海外に子ども用車椅子を届けようプロジェクトチーム
NPO 法人　海外に子ども用車椅子を送る会

小さな車椅子を海外に最初に送り出してから、当 NPO は 14 年目に入りました。多くの支援、ご協力、励ましをいただきながら、間もなく 7000 台に到達するまでに成長いたしました。現在でも一人ひとりの思いを集約して、心を込めて車椅子を送り出しております。

活動を進める中で、相模女子大学小泉教授をとおして学生たちの参加が始まったのは、2011 年からです。当初は指示待ちであった学生たちは、やがて自主的に考え、会の活動においても中核となるまでに成長を遂げました。会としても重要な役割をはたしており、頼もしい存在です。

彼女たちは、活動の中で当会が集めた車椅子を洗浄、整備、写真と採寸記録、梱包までの作業に参加しております。細心の注意をはらって慎重に進めていただいており、日本から送り出した車椅子を現地で視察することで、障がいのお子さんと家族がどれほど待ち焦がれているのか、また生活が変わっていくのかをまぶたに焼き付いたにちがいありません。病院をまわることで、日本との福祉事情が把握できたと思います。

私は、外に出たくても出られない、動きたくても動けない子どもたちが、少しでも自由に、外に出ることで、人間らしい暮らしができることを望んでおります。同時に子どもたちにわずかな希望と可能性のある未来を抱くことを望んでおります。

NPO 法人
海外に子ども用車椅子を送る会
森田祐和

はじめに

今年で東日本大震災が発生して７年目になり、学生と始めた車いす活動も同様に７年目を迎えます。この車いすの活動の発端は、東日本大震災が起きた時に、海外から受けた多くの支援に対し、「学生でもできることはないか」と考え、その恩返しとして多くの支援を受けたタイに向けて始めたプロジェクトですが、現在は活動範囲が広まり、プロジェクト名も「タイに子ども用車いす子を届けよう」から「海外に子ども用車いす子を届けよう」に変更し、世界中の子ども達に目を向ける活動へと変化しました。学生たちは、NPO 法人「海外に子ども用車いすを届ける会」を活動の拠点として、NPO の方々から指導をして頂きながら、毎年、自分たちの手で９０台の車いすをアジアの国々に届けています。スタート時は、私自身、子ども用車いすの存在は知ってはいたものの、種類や使い方も知らず、学生と一緒になって学んでいきました。初期の頃は、錆の汚れやシートの汚れを落とす清掃作業をやって満足していましたが、今では、書類や修理担当などの仕事をするようになり、気がつくと学生達は NPO の活動日の中枢をなし、メンバーからも頼られる存在として成長しました。未だに清掃作業しか出来ないのは、私だけかもしれません。

毎年、贈呈式に参加する学生が増え、多くの国を観て、色々なことを吸収して欲しいと思うようになり、タイ、マレーシア、カンボジアと贈呈国を変え、今年はミャンマーに送ることになりました。ミャンマーは、私自身も始めて足を踏み入れる国であり、TV 報道などではロヒンギャ問題などが取り上げられていたため、学生を引率するのに不安が伴いました。しかし、行ってみると想像以上の経済発展に驚き、アジア新興国のパワーを改めて認識させられました。

今回の車いすは、病院への寄贈ということもあり、病院内の見学をさせて頂き、ミャンマーの小児病棟の現状も把握することができました。日本では、多くの病院に小児病棟がありますが、ミャンマーでは地方に大病院がないため、首都ヤンゴンに子ども専用の大病院があり、地方から治療を求めて多くの人たちが集まってきています。そのため、滞在費をかけないように、病院の庭で寝泊まりしながら子どもを介護する両親の姿が多く見受けられました。このこと一つをとっても、学生にとっては衝撃的であったようです。 2 日目、日本の NGO が運営する障がい者専門の職業訓練校を訪問では、「自分が生涯生きていくための技術を身につけるために、自分の意志で入学し、昼間は大学に通い、将来は自分の店を持つこと」と夢を語る１９歳の学生の言葉に、学生全員が五体満足の自分と照らし合わせ、色々と感じたことが多かったことと思います。

５泊６日（機中１泊）の短い行程でしたが、多くの経験をするごとに、日一日と学生たちが成長していくのを感じさせられました。始めて参加した学生が、「同級生から、どうしてミャンマーなんかに行くの？それだけのお金があったら、ハワイとかもっと楽しいところに行けるじゃない。と言われ、旅費を貯めるため、友達との遊びを断ったこ

ともあり、挫折しそうになった時にあったが、今回、参加して自分がやっている活動が、本当に人の役にたっていることを実感できて良かった」という嬉しいコメントがありました。本活動を通した学生の感想は、後半の学生の感想文を読んで頂ければと思います。

今年のプロジェクトは、学生が主体的行動し、95％学生主導で活動した年と言っても過言ではありません。私が彼女たちに対して行った援護射撃は、金銭面の負担を少しでも軽減し、一人でも多くの学生が贈呈式に参加できる環境を作ることだけでしたが、学生たちは見事に、今回の贈呈式までの１年間のプロジェクトを完結してくれました。これもひとえに、学生の情熱と NPO の方々のご協力、大学側の理解があってのこと、さらに、運送費用を作るためにサポートして頂いた各企業様のご支援の賜物と思っております。この場を借りてお礼を申し上げます。今後、このプロジェクトが私の手を離れ、学校内で整備などが出きる環境が整い、大学職員、学生、卒業生と多くの相模女子大学の人々が参加できるようなシステムづくりになっていくよう願い、今後も活動を続けていきたいと思っています。

相模女子大学
学芸学部英語コミュニケーション学科
教授　小泉　京美

2017年度活動記録

作成者:下垣美優

年	月日	曜日	活動内容
2017年	4月16日	日	NPO例会参加
2017年	5月21日	日	NPO例会参加
2017年	6月13日	火	新入生歓迎会
2017年	6月18日	日	NPO例会参加
2017年	7月14日	金	かき氷研修（日光）
2017年	7月16日	日	NPO例会参加
2017年	7月20日	木	鎌倉養護学校訪問
2017年	8月20日	日	NPO例会参加
2017年	8月25日	金	かき氷シロップ作成
2017年	8月26日	土	もんじぇ祭り一日目
2017年	8月27日	日	もんじぇ祭り二日目
2017年	9月17日	日	NPO例会参加(ミャンマーPJスタート)
2017年	10月15日	日	NPO例会参加
2017年	11月7日	火	勉強会
2017年	11月3日	金	相生祭一日目
2017年	11月4日	土	相生祭二日目
2017年	11月11日	土	日光マウンテンランニング一日目
2017年	11月12日	日	日光マウンテンランニング二日目
2017年	11月19日	日	NPO例会参加
2017年	11月20日	月	ミャンマー向け船積み作業（バンニング）
2017年	12月17日	日	NPO例会参加
2018年	1月21日’	日	NPO例会参加
2018年	1月18日	木	チャリティーイベント参加
2018年	2月18日	日	NPO例会参加
2018年	2月26日	月	ミャンマー(ヤンゴン)へ出発
2018年	2月27日	火	NRH訪問(贈呈式参加)
2018年	2月28日	水	YKCH訪問(贈呈式参加)
2018年	2月28日	水	AAR Japan訪問
2018年	3月1日	木	観光(水上のパゴダ)
2018年	3月2日	金	観光(シュエダゴンパゴダ)
2018年	3月2日	金	観光(アウンサンミュージアム前見学)
2018年	3月3日	土	帰国
2018年	3月19日	日	NPO例会参加

カキ氷のシロップ作り 活動報告

作成日:2017 年 9 月 21 日(木曜日)

作成者:金刺 珠里

＊日時:2017 年 8 月 24 日(木曜日)10 時から 13 時頃

＊参加人数:金井先生、松浦先生、小泉先生、英文科 1 年 河野日和、英文科 2 年 島貫由香子、英文科 3 年 小此木玲奈、英文科 3 年 下垣美優、英文科 3 年 金刺珠里 (8 名)

＊カキ氷のシロップ種類:いちご、ブルーベリー、梅(＋梅ジャム)、レモン(＋レモンピール)

＊各材料

1. いちごシロップ(6, 250ml)

いちご 1 パック

砂糖 80〜100g

レモン 大 1

水

2, ブルーベリーシロップ(1, 250ml)

冷凍ブルーベリー 200g

砂糖 150g

レモン果汁 小 1

トッピング用ブルーベリー

水

3, 梅シロップ(2, 500ml)

梅ジュース

4, 梅ジャム

梅酒等の残り梅 25 個

砂糖 大 3

水 50ml

5, レモンシロップ(2, 500ml)

レモン 10 個

砂糖 3〜400g

蜂蜜 3〜400g

水 2L

6, レモンピール

レモンの皮 2〜3 個分

砂糖 1C.

水 1/2C

レモン果汁 大 1

グラニュー糖 1C

＊詳細内容

今回のカキ氷のシロップ作りでは、金井先生、松浦先生、小泉先生が協力してくださいました。各種類のシロップの下準備を金井先生と松浦先生が用意してくださり、私たちはお鍋で煮込む作業から行いました。ガスコンロを 4 つ用意していただいたので、3 カ所でシロップ、1 カ所でレモンピールをお鍋で煮込みました。果物が粒状から砕けるのに多少時間がかかりましたが、お鍋の底から焦げないようにしっかりかき混ぜ、味を確認しながら調整を行いました。最後は濾すことでさらになめらかなシロップを作ることが出来ました。レモンピールはお鍋から別の容器に移してから砂糖を多めにふりかけ、天日干しをしてからタッパーに入れて冷蔵庫で保存しました。各種類のシロップは瓶に詰めて冷蔵庫で保存しました。金井先生、松浦先生、小泉先生方にサポートをしていただき、参加した学生は 5 名でしたが、約 2 時間程度で作ることが出来ました。お昼は金井先生方からカレーライスとサラダ等を用意してくださり、美味しくいただきました。

もんじぇ祭りの活動報告書

作成者：島貫由香子

はじめに

もんじぇ祭りとは 2005 年から開催されている相模大野で愛され続けているお祭りである。

私たちはもんじぇ祭りに参加させていただき、今年で３年目を迎えました。

地域の皆様からも毎年、日光の天然かき氷を待ち望んでいるお声を頂き、来年もより精進していきたく思います。

もんじぇ祭りの内容

開催日時：８月２６日～８月２７日の１４時～２１時

天候：両日ともに晴れ

会場：相模大野中央公園

来場者数：９万人　（８月２６日：４万人、８月２７日：５万人）

去年より１万人来場者が多かったです。

出演者：１４組(ミュージシャン)

出店数３３店舗

【２６日】
出店料を安くしてもらう代わりに本部のお手伝いをした。　仕事内容は綿あめ・かき氷・ビールの販売をしてアルバイト代も会の収入源。
【２７日】
日光の天然氷を使ったかき氷、ビールを販売。
かき氷のシロップはイチゴ・ブルーベリー・梅・レモン・黒蜜きな粉の四種類を販売しました。
レモンはシロップとレモンピールを作り、並んでるお客さんに提供したりしました。
シロップは短期大学部食物栄養学科の金井先生にご協力して頂き、オリジナルのシロップを作りました！

会計報告

目標売上金額	４００．０００円
売上	５０７．２００円
支出	１６７．４８３円
利益	３３９．７１７円

参加者名簿

名前	学科	学年
北村優香	健康栄養学科	４年
今井夕月	英語文化コミュニケーション学科	４年
横山奈瑠実	英語文化コミュニケーション学科	３年
小此木玲奈	英語文化コミュニケーション学科	３年
若山弥紀	英語文化コミュニケーション学	３年
奥泉由花	英語文化コミュニケーション学科	３年
金刺珠理	英語文化コミュニケーション学科	３年
下垣美優	英語文化コミュニケーション学科	３年
島貫由香子	英語文化コミュニケーション学科	２年
岡部未侑	英語文化コミュニケーション学科	１年
近藤優果	社会マネージメント学科	１年
石井水希	英語文化コミュニケーション学科	１年
河野日和	英語文化コミュニケーション学科	１年
沼田智美	英語文化コミュニケーション学科	１年
鎌田舞	英語文化コミュニケーション学科	１年
森江美月	日本語日本文学科	１年

商品名	去年	今年
かき氷(500 円)	３７９杯	５８１杯
ビール(500 円)	９１杯	２１５杯
タピオカ(４００円)	１４４杯	販売なし

かき氷販売数内訳

いちご１７５杯、ブルーベリー１０９杯、梅１１７杯、黒蜜きな粉１１３杯、レモン６７杯

相生祭　報告書

作成者　奥泉由花

1　実施時期:2017 年 11 月 3 日～4日

2　場所:相模女子大学

3　企画内容:揚げバナナを 1 個 250 円(トッピング　チョコソース、キャラメルソース)で販売した。
教室内ではこのプロジェクトの活動内容紹介の展示会を行った。
教室内では筆跡鑑定もあったため受付業務も行った。

4　目的:海外に子ども用車椅子を届けるための資金調達の為。さらに、より多くの人にこの知ってもらう為。

5　販売実績

1 日目:揚げバナナのみ(チョコ 269 個、キャラメル 158 個)
売上金額　94,050 円
筆跡鑑定のみ　売上金額　25,300 円
2 日目:揚げバナナのみ(チョコ 176 個、キャラメル 79 個)
売上金額　50,150 円
筆跡鑑定のみ　売上金額　16,800 円

2 日間の売上個数　682 個(チョコ 445 個、キャラメル 237 個)
2 日間の売上合計金額　144,200 円
2 日間の筆跡鑑定合計金額　42,100 円
売上合計金額　186,300 円

6　良かった点

・多くの人に私たちの活動を知ってもらう機会となった。
・1 日目は担当場所をシフトに沿って動いていたが、混乱を防ぐため 2 日目は担当場所を変えないで行った為、スムーズに動くことができた。
・この活動を通して、主体性や協働力をさらに高めることができた

7　改善点

・適正に合わせたポジションで固定にすること。その方が仕事のスピードが早く効率良く進めることができる為。
・呼び込み用の看板を大きめに作成すること。棒などを付けてインパクトのある看板、めずらしさもアピールすること。
・価格設定の変動があったから、事前に話し合って決めること。
・調理室とテントの間で情報共有をしっかりと行うこと。
・会計をスムーズにできていなかったので、電卓を導入すること。

会計報告

売上	１８６．３００円
支出	４１．７５０円
利益	１４４．５５０円

日光マウンテンランニング 2017 報告書

作成日：2017 年 11 月 23 日

作成者：下垣・小此木・奥泉

1.実施時期：2017 年 11 月 11 日（土）から 12 日（日）

2.実施場所：栃木県　東武日光

（宿泊場所：日光「大野屋」http://www.ohnoya-ryokan.com/main.html　）

3.交通手段：北千住から東武日光駅まで特急

4.企画内容：もんじぇ祭りで、無償で氷を提供してくださる日光の天然氷屋「四代目徳次さん」へのお礼として、日光マウンテンランニングに運営のボランティアと出店に参加。

5.目的：上記の企画内容を通して主に企画力・実践力・社会性を育むこと。さらに、海外に子供用車椅子を送るための資金集めと私たちの活動をしってもらうことや、相模女子大学のＰＲをすることを目的に行った。

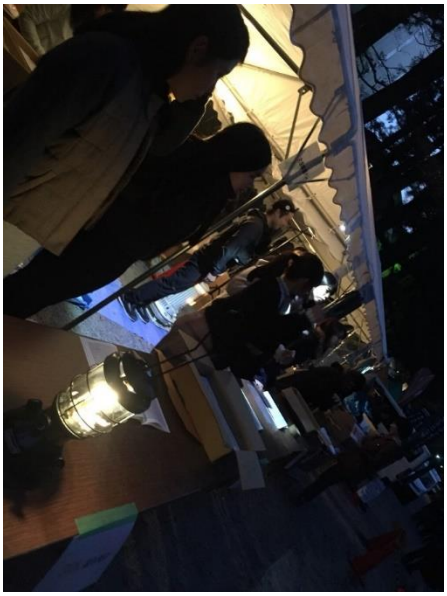
6.活動内容

①ボランティア

２日間にわたり運営のお手伝いをさせていただいた。１日目は、15 時より前日参加者受付の作業を行った。日光は相模原に比べてかなりの極寒だったが、前日から作業することにより当日の流れを把握でき、さらにはスタッフ同士のコミュニケーションが取ることができた。当日は、早朝の４時からの作業だった。前日受付の段階では、ランナーの３分の１程しか訪れなかったため、残りのランナーの受付を全て当日に行った。ランナーがゴールする頃には、完走証を渡す係とゼッケンに付いているチップを回収する係に分かれての作業だった。どちらも、最後の最後までゴールで、楽しそうに帰ってく
るランナーを迎えることができたのでやりがいを感じた。

②出店

出店は、１日目に出店の準備を行い、２日目はトルネードポテトの販売を行った。昨年度はベトナム料理のフォーを出店したが、昨年度の経験からフォーは原価が高く、売り上げがよくても利益にはならない為、原価が安く手軽に食べられるトルネードポテトに変更した。販売時の様子は、朝から油ものを食べる人が少なく売れ行きがよくなかった。そこで売れ行きを伸ばすために、声出しを徹底することや、ポテトの切れ端を活用し試食をさせるなどして売り上げを伸ばした。１人１人が本気で完売させようという気持ちになり一致団結し、一生懸命販売を行った為、無事に完売することができた。販売数が目標より上回り、完売したときの達成感や１人１人が主体的に行動することができた。



会計報告

売上	７８．９００円
支出	９３．５００円
利益	－１４．６００円

反省点：全員分の交通費を活動費から負担したことと材料費がかさんでしまったことにより利益がマイナスになってしまったこと。

改善点：来年からは出店を無しにしてボランティアのみの参加とし、出店にあたっての材料費や運ぶ手間を省く。意欲がある人に限りランナーとしての参加も検討する。

ミャンマープロジェクト報告

ミャンマー訪問メンバー			
氏名	学科	学年	担当
北村優香	健康栄養	4	
下垣美優	英語文化コミュニケーション	3	副リーダー
小西麻友	英語文化コミュニケーション	3	プロジェクトリーダー
小此木玲奈	英語文化コミュニケーション	3	副リーダー
奥泉由花	英語文化コミュニケーション	3	
横山奈瑠美	英語文化コミュニケーション	3	
若山弥紀	英語文化コミュニケーション	3	
江川こころ	英語文化コミュニケーション	3	
吉原沙渚	英語文化コミュニケーション	2	
島貫由香子	英語文化コミュニケーション	2	
石井水稀	英語文化コミュニケーション	1	
近藤優果	社会マネジメント	1	
小泉京美	英語文化コミュニケーション学科　教授		
小田謙介	NPO法人「海外に子ども用車椅子を送る会」　理事		

日本での活動メンバー			
氏名	学科	学年	担当
今井夕月	英語文化コミュニケーション	4	
金刺珠里	英語文化コミュニケーション	3	
篠原瑞樹	英語文化コミュニケーション	2	
杉山真理	英語文化コミュニケーション	2	
山田澪	英語文化コミュニケーション	1	
河野日和	英語文化コミュニケーション	1	
神戸悠	英語文化コミュニケーション	1	
鎌田舞	英語文化コミュニケーション	1	
髙村春奈	英語文化コミュニケーション	1	
北村実久	英語文化コミュニケーション	1	

ミャンマー日程

作成者：若山弥紀・石井水稀

日	時間	内容
2月26日 （月）	8:30	成田空港集合
	11:00	ANA NH813
	16:30	ヤンゴン着
	18:10	Central Hotel
	18:55	夕食　(JUNIOR DUCK RESTAURANT)
2月27日 （火）	7:15	ホテル発
	7:45	NRH 着
	9:00	贈呈式
	10:45	LUNCH、義足工場見学
	13:30	お金　両替　(marketplace by city mart)
	14:00	スーパー　買い物　(junction city)
	14:50	アウンサンマーケット
	17:45	夕食　(Feel Myanmar Food)
	19:50	ミーティング開始
	20:30	ミーティング終了
2月28日 （水）	8:15	ホテル発
	8:40	YKCH 着
	10:00	贈呈式
	11:30	LUNCH
	13:40	AAR 着
	15:00	訓練学校見学
	17:45	夕食　(HOT POT)
3月1日 （木）	9:40	ホテル　発
	11:50	水上パゴダ　着
	12:40	ココナッツ＆サトウキビジュース
	14:30	LUNCH　(hypermarket restaurant)
	15:30	スーパー　買い物
	16:20	寝釈迦　着
	18:30	夕食　(House of Memories)
3月2日 （金）	9:00	ホテル発
	9:30	シュエダゴンパヤー　着
	12:00	ホテル　チャックアウト
	12:30	アウンサンミュージアム前　見学
	13:00	LUNCH　(YKKO People's Park)
	14:00	スーパーで買い物

	15:20 16:30 18:30 20:00 22:10	アウンサンスーチー邸 マッサージ （international hotel） 夕食 （大阪王将） ヤンゴン空港　着 NH814
3月3日 （土）	6:10	成田空港　着 解散

NRH 報告書

作成者：島貫由香子

作成日：3 月 5 日

日付：2 月 27 日

場所：National Rehabilitation Hospital

時間：9：00～13：00

参加者関係者：45 人・１６組の親子・2016 年に受け取った７組

活動内容：贈呈式、NPH 関係者とランチ、施設見学

施設概要：ミャンマーで一番大きな施設、６０年前に建てられた。NGO, NPO, JICA, 赤十字の寄付で成り立っている。障害者は無料で利用することができる。NRH では障害ごとに分かれリハビリできるようになっている。また、事故や病院で足を失った場合義足を作る施設と学校とリハビリ施設が複合型になっているのはミャンマーでここだけである。贈呈式は①保健省の方からのスピーチ。②NPO の小田理事のスピーチ。③相模女子大学のプレゼンテーションが行われた。贈呈式では車椅子を受け取った子供達にお菓子やタオルがプレゼントされた。相模女子大学のプレゼンでは活動内容の紹介や日本で車椅子に乗るお子さんを持つ永峰さん、そして石井さんから頂戴したお手紙をミャンマー語に翻訳してもらい、ミャンマーの親御さんに向けて読んでもらった。

贈呈後に親御さんにインタビューした。多く共通していたことは「移動が楽になり、行動範囲が広くなったこと」８歳半の男の子の親御さんは、車椅子をもらったことで動物園に連れて行けるようになったという。車椅子をもらったことで何か変化はあったかと質問したところ、学校に行けるようになり友達もできたという。今まで寝たきりだったが、車椅子をもらい他の子供達が遊んでいる様子を外で見ることでできるようになった。

まとめ:2 年前に贈呈式に参加された方がお越しになっていて車椅子を見せてもらったが特に目立つ外傷もなく多くの親御さんが大切に使っていることが分かった。式には家族全員で同じ服を着て式に参加されている方もいてとても印象的でした。

YANKIN CHILDLEN HOSPITAL　報告書

作成者：小此木・小西・横山

作成日：2018 年 3 月 6 日

1.実施時期：2018 年 2 月 28 日（水）

2．場所　：YANKIN CHILDLEN HOSPITAL　（ヤンキン子ども病院）

3．時間：　①施設見学　午前 8 時 30 分～10 時

②贈呈式　　午後 10 時 35 分～11 時 50 分

4．　内容

①施設見学

贈呈式に先立って、Dr. Kya Zin Wai さんが病院内を案内してくれた。

同病院にはヤンゴン市内のみならず、遠く離れた地域からも子ども達が来院しており、治療を受けている間、家族は病院に住み込みしている。また、大きな病院ではあるが、ミャンマー各地から訪れる患者で病室は満杯のため、病室外の廊下にベッドを並べて子ども達が横になっている。

今回車椅子を受け取った２人の子ども達の病室に訪ねた。

９歳の男児は、入院して１か月半。脊髄と近くの骨が損傷しており手足が不自由。リハビリで少しずつ腕上がるようになったが、力が入らない為、絵を描くことはできない。下半身は、力を入れることができない為、動かすことができない。

「車椅子で外出が楽になった」と母親が言った。

６歳の男児は、ジストニアという病気で体に震えやツッパリの症状がある。
今回贈呈した車いすを使用している。

その他にも、Jaundice（黄疸）とい病気を患っている体が小さな１歳７か月の男の子と特別室で入院をしている日本脳炎の病気を患っている５歳の男の子もいた。脳の専門医の話では、日本では最近聞かなくなったが「日本脳炎」に罹る子ども達が増加しているとのことであった。

②車椅子を子供たちに贈呈する式典
贈呈式の主な出席者は、Dr. Nu Kyi さん（保健省）をはじめ Dr. Kyaw Zin Wai さん、Professor Khin Nyo Thein と看護師と当会の小田謙介理事と相模女子大学小泉京美教授と１２名の学生が参加した。ヤンキン子ども病院に初めて車いす３０台を届け、車椅子を受け取った５名の子ども達とご家族、病院関係者など式典全体で約４０名が出席した。

式典の内容は、初めに Dr.Kyaw Zin Wai さんがスピーチを行い、その後小田理事のスピーチ、そして相模女子大学チームによる日本での活動紹介のプレゼンテーションを行った。相模女子大学のプレゼンテーションの後に、２人の日本の母親からの手紙をミャンマー語で紹介していただいた。
初めてヤンキン子ども病院で、会の活動紹介を行ったため、聴衆者はプレゼンテーションの内容に興味を持ってくれた。「日本での活動は想像していたよりプロフェッショナルだ」とコメントをいただいた。

式典の終盤に差し掛かり、相模女子大チームから病院に、手作りの桜の花びらメッセージと折り鶴を手渡した。また最後に子供達と交流した際に、袋詰めしたビスコとタオルをプレゼントした。

AAR Japan 訪問 報告書

作成者：下垣美優・江川こころ・近藤優果

作成日：3 月 7 日

日にち：2 月 28 日(水)　午後

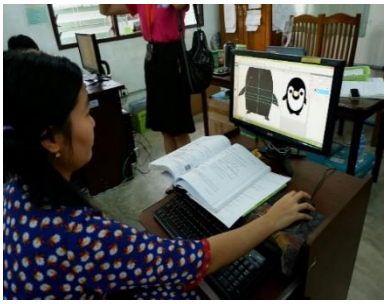
所要時間：3 時間半程

施設名：AAR Japan[難民を助ける会]　ヤンゴン事務所

お会いした方：日本人スタッフの中川善雄さん、訓練生 3 名

当日の流れ：①中川さんの自己紹介②ミャンマーの障がい者及び AAR Japan の取り組みについて中川さんからプレゼンテーション③施設見学④訓練生 3 人の紹介⑤私たちの活動の紹介

施設概要：AAR Japan では 3 つのコースで障がい者のための職業訓練を行っている。ミャンマーの障がい者における失業率は 85%以上もあり、働きたくても働くことが出来ない環境にある。その理由は、教育・社会性を得る機会の不足や主要産業で働くことが難しいことである。ヤンゴン含め、その他の地域の多くの生徒が AAR Japan に来て 3 ヶ月半の濃密な訓練を受けることで 2016 年には 92%という就職率を誇っている。~~主な~~コースは理容美容コース・洋裁コース・PC コースで、その中でも、理容美容コースは 100%、洋裁コースは 98%の就職率です。理由は、卒業したら自分の家に帰って自宅でお店を開くことが出来るためである。PC コースは、ほぼ全員就職する為に 71%と他 2 つに比べて少し数字は落ちますが、AAR Japan では卒業後も仕事の決まっていない生徒のフォローアップも行っている。ここではコミュニケーション能力・社会性・協調性を育むことができるよう、寮生活も行っています。AAR Japan の一番の目的は生徒に就職させることではなく、就職して自分でお金を得ることで自立に繋がって欲しいとのことだと中川さんであった。



写真左から洋裁コース、理容美容コース、PC コースの授業風景

寮の風景

まとめ:AAR Japan の訓練生は 18 歳から 40 歳の大人を対象としている。私たちの行う活動の対象が、子ども達とその家族の皆さんだとすれば、AAR で訓練を受けているのは、その先の人々であると言える。自分達の活動の対象となる肢体不自由児の先のことを考える機会はあまり無かったのでとても刺激を受けた。AAR Japan では、授業料は一切かからない上に、交通費もすべて負担するとのことであった。単に職業訓練をするだけでなく、3 ヶ月半の中で個人面談などのメンタルケアを行ったり、卒業後もフォローアップを行ったりと、ひとりひとりと向き合って勉強しやすい環境作りと生徒のサポートに尽力する AAR Japan に、障がいを持つ人々の手助けをしたいと思う私たちと同じ力強い思いを感じた。今回、私達の質問に対応してくれた訓練生の 3 名は、実家からバスで 4～10 時間と決して近くない場所から学びに来ていた。AAR に来た動機として「自分のお店を開きたい」「そのためにもっと必要なスキルを磨きたい」など、自分の夢について話してくれた。その為に自ら AAR Japan に入学することを望んだということであった。最後に私たちの活動についてのプレゼンテーションを行うと、訓練生の方々は感謝の気持ちと、これからもその活動を続けてほしいという思いを表明してくれた。平和で安全な日本に暮らし、五体満足の自分たちが手助けできることは AAR Japan の活動を広めること、そして車椅子を海外に送る活動をこれからも続けていくことだと思った。

プレゼンテーションの様子

Agenda

Hand Over Ceremony of Children Wheelchairs donated by the Volunteer Group to Send Wheelchairs to Overseas Children (Japan)

Date : 27.2.2018

Time : 9: 00 AM

Venue : NRH

(1) Opening of the ceremony

(2) Opening Speech by Dr. Nu Nu Kyi , Deputy Director General, Department of Medical Services, Yangon Region, Ministry of Health and Sports

(3) Remark by Representative Embassy of Japan

(4) Explanation of donation by Mr. Kensuke Oda, Director of NGO group

(5) Presentation from Sagami Women's University

(6) Handing over documents of the donation

(7) Words of Thanks by Dr. Khin Thida Aung, Medical Superintendent, National Rehabilitation Hospital

(8) Handing over the wheelchairs to children.

(9) Closing of the ceremony

(10) Taking group photo

(11) Meeting Children with wheelchairs user (2016)

(12) Refreshment.

永峰玲子様、石井晴子様のお手紙

車椅子活動は多くの人達に支えられています。
特に「海外の子どもさん達が使ってくれるのが嬉しい」とご自分のお子さんが使用した車椅子を寄付してくれる家族の方々の協力なくして活動は存在し得ません。

車椅子の寄付だけでなく、ご父兄から様々な形でご支援を頂いています。
毎月の車椅子整備活動にお子さんと一緒に参加をしてくれているご家族。整備活動だけでなく、餅つきや豚汁ランチなどの行事を先頭に立って担当してくださるお母さん達。フェイスブック等を通じて車椅子の提供を広く呼びかけてくださるお母さんの頼もしい行動力も活動を支えてくれています。

今回、ミャンマープロジェクトで二つの病院に贈るミャンマーの子どもさん達への千羽鶴や桜の花びらのメッセージ・シートの作成をお母さんに指導していただきました。

そして、二人のお母さん（永峰玲子様と石井晴子様）から「ミャンマーの皆様へ」のお手紙をお預かりしました。
これらのお手紙をミャンマー語に翻訳して、私たちのプレゼンテーションの中で病院のスタッフに読んでもらいました。

式に出席した子ども達の父兄の皆さんが真剣に聞き入っている姿は大変印象的でした。
贈呈式の緊張が和らぎ、車椅子を通して日本とミャンマーの父兄の皆さんの気持ちが繋がった瞬間だと感じました。
そして、その繋がりに私たちが関わることが出来たことに感謝をしております。

永峰様と石井様のご了承を得て、お二人のお手紙をご紹介させていただきます。

[永峰玲子様執筆]

ミャンマーのみなさまへ

こんにちは。初めまして。私は日本に住んでいる永峰と申します。
今日は皆様にお会いすることができなくてとても残念です。
お手紙で私の気持ちをお伝えする機会を与えてくださりありがとうございます。

私には８歳になるかのんという娘がいます。
日本では８歳の子供たちはお勉強をするために学校に通い、
放課後は公園でお友達とのびのび走りまわって遊んだりしています。
しかし、娘はみんなと一緒に学校に行ったり、走りまわったりすることができません。。。

娘は産まれてすぐに病気が発症して、この子は一生「一人で座ることも、話すことも、歩くこともできません。」とお医者様に言われてとても悲しかったです。
元気に産んであげられなかったことが悔しくて、毎日赤ちゃんに謝っていました。
どうしたらいいか分からない日々。不安でいっぱいになり辛かったです。

ただ一緒にお散歩がしたかった。
ただ一緒に笑いたかった。
そして、色々な経験をさせてあげたかった。

当り前の生活がとても遠くに思えて、一人ぼっちになった気持ちがしました。
しかし、何もすることができない「かわいそうな子」と思っていた赤ちゃんが
私に向かって笑ってくれたのです。
私はその天使のような彼女の笑顔をもっと見たいなぁ～
と、とても前向きな気持ちになりました。

思い切ってお外に出ると、近所の方に声をかけてもらえるようになりました。
それだけで彼女は嬉しくてニコニコしていました。
そこで彼女に合う車椅子を作ると、遠くまでお出かけできるようになりました。
沢山の人に出逢い、支えてもらい、助けてもらいながら、
様々な経験をさせてあげられることに気がつきました。

今ではスクールバスに乗って学校へ行き、沢山のお友達がいます。
お外で遊んだり、音楽や、水泳が大好きな女の子になりました。

「かわいそうな子」と思っていた彼女は毎日幸せそうに笑っています。
そんな楽しそうな姿を見ることができて、私もとっても幸せです。

「何もできない」と思っていた彼女は、
私や周りの人達に沢山の幸せを届けてくれます。
そしてびっくりするくらい沢山の素敵な出逢いをプレゼントしてくれます。
車椅子を通して世界のあちこちにいるお友達と繋げてくれるなんて！！！
今ではすっかり私の自慢の娘です。

笑顔は人を幸せにします。
どんなに辛く悲しいことがあっても、きっと笑える日がくるでしょう。
大きな空の下、私は日本からみなさんのことを応援しています。
一人でも多くのご家族に笑顔の花が咲きますように心から願っています。

永峰　玲子

[石井晴子様執筆]

ミャンマーの皆さま、こんにちは。

この度、ご縁があって娘の使用した車椅子を「NPO 法人海外に子ども用車椅子を送る会」のご協力のもと、ミャンマーの皆様のもとに届けていただくことになりました。

この車椅子は私の娘が病に倒れてからおよそ 6 年間使用していたものです。
外を走り回って遊ぶのが好きだった元気な娘はある日突然寝たきりになってしまいました。

意識不明の重体で何もわからない、何も感じていないと医師からは言われていた娘ですが、そんな娘でも、車椅子に乗って、病棟の外に出て、屋外の空気に触れるとふわっと柔らかい、とても気持ちよさそうな顔をしていました。
そんな表情を見ていると、私たち家族も、深い悲しみと絶望から救われ、少し明るい気持ちになれました。

病気であったり、障害があったりで、行動に制約があるのはとてもつらいことです。
本人はもちろんのこと、周りにいる家族も何もしてあげられないと、悲観的になります。
でも、外に出てすこしでも晴れやかな気持ちに、楽しいと思える一瞬があれば、娘の車椅子がお役に立てればとてもうれしく思います。

皆さまが心穏やかに日々過ごせるよう、遠く離れた日本からお祈り申し上げます。

石井　晴子

ミャンマープロジェクト感想文

健康栄養学科　４年
北村　優香

今回のミャンマープロジェクトでは、子ども用車椅子とたくさんの笑顔を届けることができました。毎年このボランティアを続けていますが、自分が清掃・整備した車椅子が海外の子ども達に渡って使っている姿を見ると、毎回、心から活動していてよかったと思います。正直、送っている車椅子は、清掃したといってもフレームを雑巾で拭いたりクッションについている髪や毛玉をとったりするだけで新品と同様なキレイな状態というわけではありません。それでも、車椅子を受け取った子ども達はすごく喜んでくれます。ミャンマーを訪れて、ミャンマー人の平均月収は２～３万円だと知りました。現地で車椅子を買うなら１台約１０万円以上します。日本では国などから補助金が出て安く買うことができますが、ミャンマーではそのような制度が無いことから車椅子を買うには全て実費になってしまうのです。私がミャンマーのお母さんと同じ立場だったら、高価な車椅子なんて買っていられないと思いました。その通りだと言うように、子どもさん同様喜んでくれたのは、車椅子を受け取ったご両親でした。中には若いお母さんもいて、私とそんなに年が変わらないのかなと思うと複雑な気持ちになりました。同じ年代なのに国が違うと、こんなにも生活の状況は違うのかと考え、なにも不自由なく生活できている幸せを感じました。まだまだ、車椅子が必要な子ども達がいると聞き、これからもミャンマーに子ども用車椅子を送りたいです。

大学１年生から今まで、海外に車椅子を送るボランティアに参加してきましたが、本当に多くの学びを得る事ができました。人の役に立ちたいと思って始めましたが、続けていくにつれ、車椅子の構造やどのような子どもが使っていたのか、どんな国に送っているのかなと、どんどん興味が湧いてきて、あっという間の４年間でした。ミャンマー以外にはマレーシア、カンボジアにも車椅子を送り、現地にも行きました。海外に行くまでは、海外に対して正直、他人事だと思っていましたが、海外に行ったことでニュースをよく見るようになりました。また、インターネットなどの情報を鵜呑みにしがちでしたが、生活環境や障害者への公的な補助があったり無かったりと国によって違いが様々あることを知り、情報収集する癖を身につけました。そして現地の人と実際に会って話すことで、その国の雰囲気やお国柄を肌で感じ日本と比較することでグローバルな視点を持ち、物事を考えられるようになりました。

このボランティア活動を通して、人の役に立つ喜び・コミュニケーションの重要性・健康でいることの大切さを身に染みて感じる事ができました。今年で大学卒業をしますが、今後参加できる機会があればぜひ参加したいと思います。

これまでご指導してくださいました小泉先生、小田さん、NPO の方々、チームのメンバー、学校に行かせてくれた両親に心から感謝しています。

ミャンマープロジェクト感想文

英語文化コミュニケーション学科　3年
下垣　美優

今回のミャンマー訪問で、私はこの活動を通して海外へ足を運ぶのは、昨年のカンボジアに続き二度目になります。私がこの一年で大きく変わったことは、このプロジェクトチームを引っ張っていく立場にあったことです。拙い仕事ぶりだったとは思いますが、ここまで一年間務め上げることができたことに、とりあえずはホッとしています。初めはやる気と不安にひたすら揺さぶられている感覚でしたが、ここまで来ることができたのは、率先して動くメンバーの行動力などによる支え、そして温かさのおかげだと思います。

今回ミャンマーを訪れ、昨年より自分が成長したように感じた点は、視野が広くなったことだと思います。カンボジアに訪れた際は、初めてのことだらけで気持ちに余裕がありませんでした。例えば、発展途上国に訪れたこと、自分たちの整備する車椅子を使う子どもたちと触れ合ったこと、車椅子を必要とする人たちはまだまだいるという現実を目の当たりにしたこと、すべてが初めてだった為に吸収するものが多く、それだけで頭がいっぱいになっていました。しかしミャンマーでは、贈呈式に参加してくれた子ども達と、そのご家族にも目を向け、その周りの環境を知りたいと思うようになっていました。AAR Japan を訪れた際にも、「世界には日本発祥のこんな施設が存在するんだ」という感想で終わらず、そこで勉強する生徒の皆さんの心情やこれから目指す未来、スタッフの皆さんはどのような気持ちで働いているのかなど、様々なことに興味を持ちました。AAR Japan で行われる活動が自分たちの活動にどう結びついてくるのかも考えました。私たちの活動の対象が障がい児とそのご家族だとしたら、AAR で学ぶ生徒は、自立をすることを目的とした、その先にいる人々だということ。五体満足な自分たちが手助けできることは一体何なのかなど、昨年の私だったらここまで思考を巡らせることはできなかったのではないかと思います。

私は、昨年のカンボジア訪問の感想文に「子どもたちの笑顔を見ることができて嬉しかった」と書きました。まったくその通りだし、ミャンマー訪問においても同じことを思ったのですが、カンボジアの段階では本当にそれだけでした。目の前で起こっていることに驚いたり感動したりと、ひたすら受け身だった私が、ミャンマーにおいては、それ以上のことを知ろうとしたり考えていたりしていたのは自分でも成長した点であると思います。もちろん成長したのは私だけではありません。NRH と YCH の贈呈式で行われたプレゼンテーションにもすごく感動しました。人前に出ることが苦手な私には到底できないことをやり遂げる 3 人を心から尊敬しましたし、その他にも、意見や質問を交わす場で積極的に発言するメンバーが多かったりしたことなど、チーム全体の著しい成長を感じられた訪問であったと思います。

ガイドとして 5 日間をともにしてくださったニラーさんとリンタロウくんとの別れは本当に惜しみましたし、訪れた場所一つ一つが大切な思い出になりました。ひとつひとつの「縁」に心から感謝しています。就職活動が本格化する前にミャンマーを訪れたことが自分にとって一つのけじめになり、この経験を自分のものとして大切にしていきたいです。そして、今度は新たに引っ張っていく立場になる次の世代のサポートに徹し、新たに加入してくるだろうメンバーにも大切に引き継いでいけたらと思っています。

2017 年度の活動を振り返って

英語文化コミュニケーション学科
3 年　小西　麻結

私は今年度、北村先輩から定例会係を引き継ぎ、全体では副代表、ミャンマープロジェクトではリーダーをやらせて頂きました。３年生になってからのこの１年間は、会を引っ張る立場の難しさというものを痛感致しました。その分メンバー同士の繋がりの強さを感じ、非常に濃い１年間になりました。

定例会では役割を分担し、作業の進行状況を見て指示を出すこともしてきました。中でも今年は相模女子のメンバー以外の福生高校、ベトナム、エチオピアなどの方々と一緒に作業することを意識的に行いました。大学にはない、幅広い年齢層や国籍の方々と交流できる機会があることがこの活動の醍醐味と言って良いと思います。私は１年～2 年生時は相手から話しかけられる事を待ちがちでした。しかし自分から作業を教え、逆に少しでも疑問に思うことは聞き、日本とベトナムの文化の違いについて話し合うなど、積極的にコミュニケーションを取ることの楽しさを見出しました。

ミャンマープロジェクトでは毎日手探り状態で四苦八苦しながら駆け抜けてきました。昨年の経験があるため気持ちに少しは余裕がありましたが、去年以上のプロジェクトにしなければと正直の所プレッシャーに感じることもありました。しかし小田さんに「相模チームはもう小西さんのチームですよ」と言って頂いたことで自分のできる範囲のことを全力でやりきろうと決心しました。実際の所は自分一人の力はほんの極一部で、メンバー全員の協力が非常に大きかったと感じます。今年はミャンマーに訪問しないメンバーが過半数おり、何かしらの形で携わってほしいという思いの元、タオル集めと桜のメッセージ集めをしてプロジェクトに参加してもらいました。タオルは 170 枚集まり、桜のアートも納得のいくものを作ることができました。訪問メンバーもそれぞれの役割を責任もって全うしてくれました。また、会の活動に参加している永峰さんには献身的にミャンマープロジェクトを応援して下さりました。書いて下さったお手紙が現地で行ったプレゼンで重要なキーになったのでは、と私は感じます。このようにチームメンバーの個々の活躍や車椅子の会の方々の支えにより、協力することの重要性を体感しました。

最後に、私が活動で得たことは 3 つあります。それは、①誰かがやれば良いという考えよりも自分から名乗りを上げる「挑戦力」、②自分の中でだけで解決するだけではなく、情報を発信して意見を聞く「情報伝達力とコミュニケーション力」、③周りを巻き込んでプロジェクトを進める「推進力」です。今後もこの活動を通じ、車椅子を届けることで自分の視野も広げていきたいと思います。

ミャンマープロジェクト感想文

英語文化コミュニケーション学科　３年
小此木　玲奈

ミャンマーの訪問を終えて、自分の成長と、これからも継続して子供用車いすを送り続けるべきだと強く感じました。

初めに、ミャンマーの訪問を終えて、主に２つ自分の成長が感じられました。

１つ目は、自分に自信を持てるようになったことです。前回、カンボジアへ訪れた際自分に自信がなく、なよなよしていました。前回も今回も現地でも日本での活動内容を英語でプレゼンテーションする係に携わり、ド緊張の中プレゼンテーションを行いました。前回と比較すると、前回は自分に自信が持てず、小さい声でゴニョゴニョと話してしまい、カンボジアの方々に私たちの想いが届かなかったと後悔しました。リベンジという形で、今回もプレゼンテーションをヤンキン子供病院とナショナルリハビリテーション病院で行いました。今回は、落ち着いて、相手が聞きやすいようにゆっくりと話し、想いが伝わるように自信を持ってプレゼンテーションをすることができました。堂々とプレゼンテーションができたので、私たちの想いがミャンマーの方に伝わったと自負しています。

２つ目は、疑問を持ち、質問できるようになったことです。前回のカンボジア訪問では、何も考えずに、ただただ現状を見て立ち尽くしていただけでした。しかし、今回のミャンマーでは物事に対して疑問を持ち・質問するようになりました。例えば、リハビリテーション病院では「リハビリをしている人達は、毎日決められた時間で行っているのですか？」とつたない英語で話しかけたり、また、ＡＡＲでは「学生さんの男女の比率は？」などと沢山、興味や疑問を持って質問しました。前回、ただ立ち尽くしていて１つも疑問を持つことができなかった人間が、興味や疑問を持てるようになり、勇気をもって質問できるようになったことが「あっ、成長したな～」と感じました。

ミャンマーの旅は、自分の成長も感じた以外に、「今、車いすを必要としている子たちがたくさんいる」と自分の目で・耳で体験しました。ミャンマーに訪れる前から、必要だということはわかっていましたが、実際に子供たちと子供たちの家族に会ってみたら、「順番に車いすが受け渡されているの。たくさんの子供たちが待っているよ。」と話を聞いて、心が痛くなりました。もっと多くの子供たちに、抱っこされた生活から車いすを使って色々な世界を見せてあげたい、家族には体の負荷を軽減させてあげたいという気持ちが強くなりました。また、学校に行くことができなかった子共が車いす生活になり学校へ行けるようになった子共が数名おり、非常にうれしく思いました。喜怒哀楽の旅でしたが、ミャンマーの子供たちや家族からも学ぶことが多かったです。そして５日間、小田さんをはじめ、私たちのためにつきっきりで一緒にいてくれたニラーさんリンタロウくんに感謝の気持ちでいっぱいです。多くの人との「縁」を大切に、これからも車いすを送り続けていきます。

ミャンマープロジェクト感想文

英語文化コミュニケーション学科　3 年
奥泉　由花

今回、私はカンボジアに引き続き 2 度目の訪問となりました。最初に、今年度もミャンマーへ現地訪問できたことに NPO の方々をはじめ、小泉先生に感謝したいと思います。
今回、ミャンマーという国にこのプロジェクトで訪問できたことがとても光栄です。その理由は、プライベートの海外旅行では行く機会がなさそうな国だったからです。行く前は、ミャンマーの政治問題の関係で心配していた部分もありました。しかしながら、滞在する中で不安に感じた事は全くありませんでした。毎日、沢山の素晴らしい出会いがあり、日々がかけがえのない大切な思い出となったからです。ミャンマーに行く前は、カンボジアよりも経済発展をしていないイメージがとてもありました。けれども、実際に訪れてみると街に活気あり、沢山の人で溢れていたので印象的で驚きました。ミャンマーとカンボジアの共通点を考えました。それは「人の温かさ」です。去年度の訪問、今年度と人に恵まれているなと感じました。それは、訪問する先で地元の皆さんが温かく私たちを迎え入れて下さったからです。言葉の壁はありましたが、ジェスチャや顔の表情だけでも十分にコミュニケーションを図ることができるという事を改めて感じました。何よりも積極的に話しかけてくれた事自体がとても嬉しかったです。この様に素晴らしい日常を過ごすことができたのも、無事にミャンマープロジェクトを終えられたからだと思います。

ミャンマーの訪問を通して、印象的に残っている事は 2 つあります。1 つ目は、贈呈式の違いです。昨年度のカンボジアの贈呈式は想像以上に盛大に行われました。メディアや関係者、受け取った子ども達と親御さんの人数を数えることが困難な程でした。一方、今年度のミャンマーの贈呈式は小規模でご家族や病院の先生、看護師さんが主に出席していました。私は、両方の異なる贈呈式に参加できたことにとても嬉しく思います。今年は、贈呈式後に車椅子を使ってくれている親御さんたちに直接インタビューをすることができました。実際に使っている人の生の声を聞くことができるのはとても有難いことです。したがって、この貴重な経験も小規模だからできた事なので感謝したいと思います。さらに、インタビューをする中で共通していたことが「車椅子の需要が高く、今後も送ってほしい」という声です。この声を直接聞けたことによって、活動の意義をさらに感じ、その気持ちに出来る限りの力で応えていきたいと強く思いました。

2 つ目は、私たちと共に行動をして下さったガイドのニラーさんと、息子のリンタロウ君のおかげで、楽しく安全に過ごすことができました。ニラーさんはいつもパワフルで私たちの中心であり元気の源でした。リンタロウ君も私たちのガイドとなって沢山働いてくれて、その姿がとても格好良かったです。本当に彼らのおかげで、私たちの訪問が実のあるものになり、生涯のかけがえのない素晴らしい思い出を作ってくれました。今回の訪問をしたことで、チームの団結力が一層深まったと感じました。今年は私にとって最後の 1 年なので、悔いのないように日々の活動を大切にし、全力でやり抜きたいと思います。

ミャンマーで成長を感じられたこと

英語文化コミュニケーション学科　3 年
横山　奈瑠実

私が今回のミャンマー訪問で自分の成長を感じられたことは、3つあります。1つ目は自分の意見をまとめて発表するのが今まで苦手でしたが、職業訓練校に伺った際に積極的に質問をすることができたことです。また、実際に職業訓練校で日々勉強している生徒の方達の視点に立って物事を考えることができました。普段の学校生活などで、このような機会があっても、相手の視点に立って考えたり積極的に質問したりできなかったと思います。しかし、実際に現地に行ったことで普段とは全く違う感じ方ができたのだと思います。
職業訓練校の生徒の方達が暑くてもクーラーがなかったり、約 20 人程の大部屋で寝泊まりしなければならない大変な環境でも「勉強をするのが楽しい」と言っていたことと、笑顔で勉強に取り組んでいる姿に感銘を受けました。また、今回通訳をしてくださったニラーさんが、「日本語を勉強するのが楽しかった」と言っていたことも非常に印象に残りました。私は今まで勉強が当たり前にできる環境にいたし、自発的に勉強するというより仕方なく義務感でやっているような感じでしたが、これからは当たり前に勉強ができる環境にいることに感謝して、残りの学生生活で悔いが残らないように勉強しなくてはいけないと思いました。また、もっと楽しみながら勉強しようと思いました。そして、勉強だけではなく就職活動など、やりたくないと思ってしまうことも考え方を変えて楽しみながら取り組んでいこうと思いました。

2 つ目は自分の就職について改めて考えることができたことです。職業訓練校のサポートとして勤務している中川さんのお話を伺った際に、強い信念を持ってお仕事をされているのが素晴らしいと思いました。私は、3 月から就職活動が本格的に始まっていて、自分が就きたい職業は決まっていましたが、中川さんのようにしっかりと将来のビジョンを見据えて自分の就職について考えていなかったので、もっと自分の将来について考えなくてはいけないと思いました。

3 つ目は現地で実際に車椅子を使用してくれている子ども達の姿が見ることができたことと、ご両親のお話が伺えたことで、この会の重要性を深く感じることができ、海外の車椅子を必要としている貧しい子ども達のところに、1台でも多くの車椅子を届けたいという思いが強くなったことです。実際に現地に行かないと感じられないことが、たくさんありました。病気で苦しんでいる子ども達を目の当たりにして、何もできない自分をもどかしく思いました。ミャンマーで学んだことを忘れずに、これからも会の活動に携わっていきたいと思いました。

ミャンマープロジェクト感想文

英語文化コミュニケーション学科　3年
若山　弥紀

初めてのミャンマー、初めての贈呈式への出席は、私にとってかけがえのない思い出となりました。帰国した今、報告書作成や、写真を見返したりしていると、ヤンゴンがとても恋しくなってきます。充実した五日間の情景が脳裏に浮かんできます。特に、ツアーガイドをしてくださった、エネルギーに満ち溢れていたニラーさん、それからリンタロウ君の、あの優しい笑顔が忘れられません。

NRH での贈呈式では、多くのご家族が出席してくださり、親御さんからお話を聞くことができたのと、子供達との交流ができたことが印象深かったです。車椅子があることによって学校に行けるようになり友達も作れた、というお話を聞いたときは、とても嬉しかったです。ミャンマーでは車椅子は高価なものであるため、私達の活動が多くの人々の助けに繋がっていることを身にしみて実感しました。また、車椅子は抽選での付与ということなので、待っている子供達のためにも、今後も私達の活動は続けていかなければいけないと強く思いました。義足工場見学では、沢山の質問に答えて頂きました。義足の三大要因は、事故、糖尿病、生まれつき、だそうですが、ミャンマーに糖尿病の人が多い事には驚きました。確かに、どこへ行ってもコーヒーがとても甘かったのが印象的で、ミャンマーの人々は甘党なのだなと思いました。食事に関しては、野菜も多く使われていて、健康的のように思いましたが、暑さ故なのか、甘い飲み物でエネルギーをつけたくなるのでしょうか。他にも運動不足、または経済的理由から病院に通うことが難しいことも考えられると思います。ミャンマーの糖尿病事情がとても気になり、どうか改善できることを願いたいと思いました。

YKCH では、病院内の案内と、入院している患者さんの症状についてお話を伺いました。脊髄の横に広がる骨の部分が弱くなり集中治療室に行ったことのある９歳の男の子は、以前はおんぶをされていましたが、車椅子によって生活が便利になったそうです。彼は脚がとても細く、力が入らないようでした。向かい側には、体が震えてしまう病気を患う子が入院していましたが、重度の病気を患う全ての子供達が車椅子を通して、寝たきりではなく、少しでも外にでて太陽の光を浴びる時間が増えてほしいです。

AAR 職業訓練校では、同じ日本人である中川さんが、障害者の人々を支援するために、ミャンマーで活躍していることに感銘を受けました。障害を持った人々に人生の希望を与えてくれる場があることは素晴らしいと感じたのと、洋裁コースの生徒さんが上手に足踏みミシンを使いこなし、綺麗な服を作成している姿を見て、感心するばかりでした。彼等の輝かしい未来が楽しみです。同時に私自身も今後の就職活動に力をいれなければ、と勇気づけられました。

施設訪問だけではなく、観光の面でも印象に残る事ばかりでした。水上パゴダや、シュエダゴンパヤーでは、輝く金色の景色に圧倒されました。民族衣装ロンジーを身につけて町を散策したり、生まれた曜日の神様へお祈りをしたり、ミャンマー料理を味わったりと、短い期間の中でミャンマーを堪能することができました。野犬が多かったり、タナカというお化粧を男女関係なくつけていたり、マッサージ店でスタッフがマッサージ中に韓国ドラマをみながら大爆笑をしていたり、ツアーガイドさんが仕事場に息子を連れてきたりと、日本では考えられないことが多いミャンマーは、とても興味深く面白い国でした。

今回のミャンマー訪問を共に過ごしてくださった、小田さん、小泉先生、学生の皆さんに心から感謝

いたします。私はこの会に入って一年も経っていませんが、皆さんとミャンマー訪問へご一緒させて頂いたことに、大変嬉しく思います。皆さんから学ぶことは多くあり、とても刺激的な日々でした。

小泉先生がおっしゃっていたように、今回のミャンマー訪問の体験を通して、日本の良さを改めて知る機会となりました。毎日安心して過ごせる現状に感謝する気持ちを忘れずに、今後も学ぶことを怠らず、質のある人生を歩んでいきたいです。

今回車イスボランティアでミャンマー訪問に参加して

英語文化コミュニケーション学科　3年
江川　こころ

今回初めて車イスボランティア活動でミャンマー訪問をし、学びあり、感動ありの経験ができました。それは主に四つあります。

一つ目は、現地でのプレゼンです。小此木・吉原・島貫の三人のプレゼンの活躍ぶりを目で見たとき、涙が出そうでした。半年間、たくさんのアドバイスと指導で素敵なプレゼンになっており、英語での説明も一生懸命に伝えようとしていたのでその心が伝わりました。また、急遽三日目の発表で、私も入り四人で発表したのですが、私はとても緊張して、思うように発表できずとても悔しい思いをしました。失敗もしたので今後、プレゼンを努力しようと思いました。また、臨機応変な対応をする力を今後身につけなければならないと学びました。

二つ目は、病院等での訪問です。現地で既に車イスを現在利用しているご家族と実際に会話をしてみてうれしい言葉をもらいました。ご家族の親御さんからは、車イスをもらえてよかったと喜んでいました。自分が寒い中、雨の日でも丁寧に清掃した車イスに乗ってもらい、私は心がほっこりする気持ちで嬉しくなりました。この時、車イス活動を行い、自分の足で現地に行き、目で見て耳で聞いて本当に良かったと思います。また、AAR で出会った三人の学校の生徒です。事故で右足に障害を持った男の子や手に障害を持った女の子を見て、それでも笑顔で生活しているとの話を聞いて素晴らしいなと思いました。私は日々当たり前のように生活している事が他の人には当たり前ではなくて羨ましいって思う人もいます。その中で、私は自分が日々何不自由なく快適に過ごしている事を感謝しなければならないことに気がつくことができました。

三つ目は、観光です。初めての東南アジア渡航だったのでイメージと写真、インターネットでの情報でしか理解できていなかったのですが、実際に目で見て耳で聞いて現地の方との交流をしてみて現地でしかわからない情報を吸収することができました。知識だけでは理解できないことを経験する事でミャンマーという国、宗教、文化、食、生活について肌で感じることができたことが何よりも価値のある体験でした。楽しい思いだけで訪れることではなく、実際に生活している人々の生の声を聞くことで学びある五日間だったと思います。

四つ目は、ニラさん・リンタロウくんのバスガイド、バスの運転手です。五日間共にヤンゴンを周り、病院にも一緒に行き、プレゼンの翻訳をして下さったニラーさんには感謝の気持ちでしかありませんでした。ニラーさんのパワフルな人柄や、私達日本人に対してのおもてなし、リンタロウくんの頼りがいのあるカメラマン、困っている人を助ける精神に感動しました。二人の一生懸命さが伝わり、最後の別れる際では惜しむほどでした。また、ミャンマーは車の通りが多く、交通事故の隣り合わせの生活であると思っていたが、バスの運転手の方々は私達を安全に最初から最後まで送って下さったことにとても嬉しく思いました。私は小学校・中学校・高校と三回バスガイドのいる観光をしましたが、その中でも、今回、初めて心からステキなバスガイドの二人と運転手に会うことができ、生涯、忘れる事のないバスガイドだったと思います。

五つ目は自分自身を見つめなおす 5 日間でした。自分が成長できところ、改善すべきところを改めて今回のミャンマー訪問で感じ取り、見つめなおす機会になりました。現地に実際に行かなければ

理解できないことを学び、発見があり、実体験をもとに話すことができたのはとても良い体験だった、改めて新聞の取材のとき感じました。改善点は臨機応変な判断力、自己分析をより強化する必要があると思います。判断する力不足していると瞬時な対応の的確な判断を逃します。例えばミャンマーの交通です。車と人との距離が近いから、交通事故にもつながる生活を実際に見て一分一秒が大切で命にもかかわる事を理解し、自分自身も将来の仕事で的確な判断力臨機応変な対応力が必要と改めて学びました。今後は、考えて行動すると共に行動する時に、メリット・デメリット・問題が裏にある事を十分に事前準備・理解をすることが大切と学び、考えて行動するように努力します。成長した部分は吸収力、素直さです。吸収力はこの五日間は濃密な学びの場でした。日本とは違うからこそ学びたいと思う一つ一つの「なぜ」から始まる興味・好奇心と、より理解したい意欲を心から思えたので今回初めてのミャンマー渡航訪問で充実した学びと自分を成長できた経験でした。

ミャンマープロジェクト感想文

英語文化コミュニケーション学科　2 年
吉原　沙渚

2/26-3/3、ミャンマーのヤンゴンに訪問しました。二つの子ども病院と日本人が始めた職業訓練学校に行きました。子ども病院では、去年に引き続き贈呈式内で、私たちの活動についてプレゼンテーションをさせていただきました。昨年のカンボジア訪問では、計画性がなく前日の夜までメンバーを巻き込んで修正し、次の日には体調万全で出来なかったことがありました。今回はそのようなことがないように、前からプレゼンテーションメンバーで協力し合い、当日に間に合うように資料を作れたことは成長したと思いました。ミャンマーでの贈呈式では、車いすを使うお子さんを持つお母さんからの手紙をミャンマー語に訳してもらい、通訳の人に読んでいただきました。お母さんたちの目から涙が出てきているのを見て翻訳、したことで伝わり方がここまで違うことを感じさせられました。

ミャンマーの贈呈式に参加された方は、カンボジアに比べて少なくこぢんまりとした式でした。そこでは、子どもへ車いすを送られる方法が違うことを知りました。組織に送られるカンボジアに対して、ミャンマーでは一つ一つの病院に送り診断を受けた後に送られるので、子どもに合った車いすが渡されることを聞き、手厚いサポートがあるのだと思いました。そのような人情ある人と関われる機会をミャンマーで持つことがありました。ヤンキンこども病院で病院見学をしているとき体調を崩してしまいました。その際、診察を待つ子どもたちがいるにも関わらず、私の元に飛んできて応急処置をしてくれたことです。そのお陰で、すぐに元気になることができました。一生懸命に見てくれるスタッフさんが多く、安心できる場所だなと思うと同時に、このような経験が出来て良かったと思います。ナショナルリハビリ病院での見学ではリハビリ施設の豊富さを知り、ミャンマーでのリハビリはその人に合ったリハビリができる場所だと感じました。二つの国に訪問したことでその国の特徴が分かり改めて貴重な経験だなと実感しました。

職業訓練学校では、多くの学生が夢を持って一生懸命に勉強をしていました。ここでも 1 コースの生徒数に対し、数名の先生が細かく教えている風景があり安心感のある雰囲気でした。卒業後もサポートしてもらえる学校は、生徒や生徒の家族も含めて見ると将来に希望の光を照らしてくれる場所であると思います。限られた資材でしか勉強できない環境の中、必死に勉強する姿に自分の勉強姿勢を見直し、日本で生活できている恵みに改めて幸せだと感じるきっかけになりました。ここで勉強する人たちのことを忘れずに、日本で負けないくらい頑張りたいです。

当初、今年は訪問に参加しないと考えていました。理由は、留学していたため、前期の活動にほとんど参加せずにいたからです。しかし、一緒に行こうとメンバーに背中を押され、行くことになりました。自分の中では、「この訪問で何かを果たさない」と思い、色々な係りをやらせていただきました。昨年は、ついて行くことに必死でしたが、今年はプレゼン係や写真係を通して積極的に行動に移すことが出来るようになったと感じています。また、プレゼン係は現地の方と打ち合わせをするために話すことが多いと感じました。今までは英語も自信がなかったですが、話してみようという姿勢になっている自分がいるのを感じ、成長のある旅だと感じました。このような経験ができたのは、ミャンマー訪問プロジェクトを引っ張ってくださった NPO 法人の小田理事、小泉先生をは

じめ、先輩方や定例会メンバーや同期、後輩のおかげだと思います。また、現地でガイド翻訳をしてくださったニラーさん、りんたろう君にも感謝しています。

　来年度から三年生となり、後輩たちをリードしていく立場になります。来年度の訪問もメンバー全員が充実したものとなるよう、ミャンマー訪問で、得た様々な気持ちを思い出しながら毎月の定例会からイベントすべてに全力で向き合って、楽しみながらも気を引き締めていきたいと思います。

ミャンマープロジェクト感想文

英語文化コミュニケーション学科　2 年
島貫　由香子

ミャンマー訪問を通して感じたことは、生命の素晴らしさと生命力です。ミャンマーの人の平均給料は、二万円で日本に住んでいる私からしたら、驚くような値段でした。道端には野良犬が寝転がったり、野良犬が自由気ままに歩いています。道を歩く人が噛まれたりしたらひとたまりもないのに。そんな危険と隣り合わせのような生活の中で、AAR の生徒たちに「将来の夢はありますか？」と質問したところ、みんな回答は即答。そして目を輝かせながら「自分のお店を開きたい」「家族を楽にさせるために働く」といったことを話してくれました。今、私は自分が将来どんな仕事をしたいかと聞かれたら、詰まって話せないです。また、あと一年後に就活が始まることが、今から億劫に感じてしまいます。今回のミャンマー訪問のメンバーは、三年生がとても多く、時期的にも就活解禁日ということもあり、一年早く就活の緊張感を先輩たちから感じることができで、履歴書を書く先輩の姿を目にして背筋が伸びる思いでした。“まだ一年ある。”ではなくもう一年しかない。今の時期に、そう思わせてくれたこのミャンマー訪問に感謝します。私は、この活動を通して去年もカンボジア訪問をしました。そこで感じたカンボジアとミャンマー訪問の違いは、病院に向けて車椅子を送ったか、政府に車椅子を送ったかです。ミャンマー車椅子を病院に贈呈したのでその病院内でこじんまりと行われましたが、カンボジアでは盛大に行われ、テレビ局も式を撮影しに来ていたのが印象的でした。今回初めて、私は贈呈式でプレゼンテーションを行なったのですが、去年の記者の数や参列者の数を想像していたので、プレゼンでは緊張することなく話せたと自分では思っています。また、道路がミャンマーの方が整っていて、二年前に贈呈された車椅子の保存状態も良くとても綺麗でした。カンボジアでは砂利道が多く、すぐ車椅子が壊れてしまうと聞いていたので、その点に関してミャンマーは心配いりませんでした。また、ある親御さんに車椅子をもらって何か良いことはあったかと話を聞くと、今まで車椅子なしでは行けなかった動物園に連れて行くことができたと言っていました。その親御さんは、今まで子供をおんぶしたり抱っこをしたりしていたので腰への負担があったが、今は車椅子に乗せて移動できるので助かっていると話していました。ミャンマーでは、自分達で車椅子を買えるだけの経済状況の人は少なく、とても助かると贈呈式に参加された親御さんは言っていました。私たちの送った車椅子で生活が楽になったと話していた人が多く、これからもしっかりと活動を続けようと思いました。今回の訪問は五日間とカンボジアの時より短く、最終日は、もっと居たいと感じました。ミャンマー訪問を通して、年の近い異国の少年少女とコミュニケーションを通し、自分の将来のことや一年後の自分と、先輩方を重ねて考えられたので、この機会はとても貴重なものでした。就職活動までの残り一年間いろんなことに関心を持ち自分を成長させようと感じました。

ミャンマー感想文

英語文化コミュニケーション学科　１年
石井　水稀

私は今年大学に入学してから、この海外に子ども用車椅子を届けようプロジェクトに参加するようになり、活動を一年間続けてきました。その一年間の集大成の意味も込めてミャンマー訪問に参加しました。今回のミャンマー訪問では、どこを切り取っても良い経験でした。まず一つ目に、今回のミャンマープロジェクトを通して、私は沢山失敗しました。ほぼ初めての海外で、失敗しながら新しいことをたくさん学び吸収できました。失敗したことはそのままにせず、どうしたらよいのかを考えて実行することによって、次の成功に繋がると学べました。

次にプレゼンテーションです。今回、私はプレゼンテーションの係ではなかったのですが、AAR職業訓練学校でプレゼンテーションをすることになり、1年生も経験としてやってみないかと先輩からお話をいただいて、挑戦してみることに決めました。練習をして挑みましたが、結果としては自分の納得のいくものではなく、なかなかうまくはいきませんでした。しかし、今回プレゼンテーションをしてみて、一歩踏みだしてよかったなと思いました。この経験から、もっとプレゼンテーションをうまくなりたいという気持ちが強くなりましたし、そのための努力をしようと思えました。やるかやらないかの選択をやると選択できたこと、プレゼンテーション自体を、英語でするかしないかの選択を英語ですると選択できたことが良かったです。このように自分を高められる選択を、これからも忘れず続けたいと思います。また、自分が普段している活動がミャンマーの子供たちに届いていることを自分の目で確認できたことが、本当にうれしかったです。自分たちが清掃し整備した車椅子を、ミャンマーの子供たちが使い、車椅子を使うことで生活が豊かになり、笑顔をみられて、私たちが何のために活動しているのか感じることができました。一方で、ミャンマーへ行ったことにより、まだまだな現状も確認できました。まだまだミャンマーで車椅子を、必要としている子供たちがたくさんいることはもちろんでしたが、使い方が適当かということなど、様々な問題がみえてきました。これからも活動していくうえで、ただ車椅子を送るだけでなく、どのようにして生きる力を与えられるのかが大事だと感じました。

今回ミャンマーに行くことを決断して、本当に良かったです。これは私の中で本当に大きな経験となりました。ミャンマーにいったことで、自分の普段あるあたりまえが、全くあたりまえではなくて、ありがたいことで、感謝しなくてはいけないなと感じさせられました。これから生きていくうえでの価値観を変えさせてくれました。

ミャンマープロジェクト感想文

社会マネジメント学科　１年
近藤　優果

私は今回のプロジェクトの参加が初めて海外へ行くきっかけとなりました。ミャンマーの空港に着いた時、やっと自分が外国にいることを実感しました。まず驚いたことは車の数、警音器が頻繁に鳴ること、人と車の距離感、信号機が秒数で表示されていることでした。些細なことでも、日本との違いを見つけることが楽しくてバスの中でも外をずっと眺めていました。

NRH で子どもたちと実際に会えたとき、目線を合わせてプレゼントを渡したとき、挨拶はどうしたらよいのか分からなくなりました。当たり前のように「こんにちは」を使っているけれど、ここでは使えません。ただ笑顔でプレゼントを渡すことしかできませんでした。このとき、笑顔になってくれる子どもとそのお父さん、お母さんを自分の目で見ることが出来て嬉しいという気持ちと、会話が出来なくて悔しいという気持ちがありました。施設内を見学させていただいているときに、受付の人が「ミンガラーバー」と声をかけてくれました。ここで、ミャンマー語の「こんにちは」を知ることが出来ました。だから来年は英会話をできるようにして、訪問する国の言葉も覚えてから行こうと思います。病院にいる人は目が合うとほとんどの人が微笑んでくれて、嬉しくなりました。

ヤンキン子ども病院は二回目ということで緊張も少しとけて、病院内もゆっくりとみることが出来ました。子どもたちの現状を目だけではなく、身体でもしっかりと感じることが出来たような気がしました。自分の意思で体を動かして、自由に生活できていることがどれだけ幸せなことか知りました。車椅子を喜んでくれている、これからも必要としてくれる、その声を自分の耳で聞くことが出来たこと、これが今回ミャンマーに来た目的だと思います。自分で聞けたからこそ、この活動の意味が分かりました。

AAR は、私が興味を持っている福祉の分野に関わっています。ここでプレゼンの機会をいただけて、緊張もありましたが、嬉しいという気持ちの方が大きかったです。職業訓練校の学生さんは寮生活を楽しんでいて、最後に帰るとき 3 人の学生さんが目を合わせて笑っていて、仲良しそうでここは素敵な場所だと思いました。ただの観光だけでは楽しいという気持ちだけだと思います。しかし、この活動は様々な感情が何度も繰り返し湧いてきて気持ちが追い付かないときもありましたが、それほど沢山の刺激を受けることが出来て、得した気分になりました。ミャンマーに行くことだけでもすごいことなのに、普通は経験できないようなことや気付けないことを学べるこのプロジェクトに参加していることは、とても誇らしく、自信につながりました。来年は、行くだけではなく胸を張って行きたいです。今回とてもお世話になり、ミャンマーでの不安を取り除いてくれた人、ニラーさんとリンタロウ君が私は大好きです。出会えたことがとても嬉しいです。ニラーさんは小田さんのことを「先生」と言っていました。成田空港に帰ってきたときに私も小田先生と言ってしまいました。自分でも驚きましたが、それくらいニラーさんと一緒にいることがあたりまえになっていたんだと思います。１日、やることがいっぱいで長かったのに、日本に帰ることが嫌になるくらい、ミャンマーとニラーさんが大好きになりました。初めての海外が、プロジェクトがきっかけで、訪れた先がミャンマーで良かったと心から思いました。次に行く国では心残りがないように、日本で今できることを精一杯取り組んでいこうと思います。

1年間の活動を振り返って

学芸学部　英語文化コミュニケーション学科　4年
今井　夕月

私は、このボランティア活動を大学 1 年生の頃から参加してきました。これまでは相模女子大学の学生のうちの一人という形で海外に子ども用車椅子を送る会に関わってきましたが、今年は学生という立場と NPO という立場、両面で活動に参加させていただき、これまでとは少し違った角度でボランティア活動をすることができたと感じています。例えば、理事会への参加、定例会での作業効率向上の仕組みを考える事や、1 年間の贈呈スケジュールを把握しどのくらいのペースで車椅子を仕上げていくかの換算などこれまで経験していないことをすることができました。こうした経験から、NPO 法人がどのように成り立っているのか知ることがき、社会とのつながりの重要性を実感することができました。

相模女子大学のチームとしての活動内では、新リーダーのサポート役としてチーム全体を客観的に見るように心がけていました。そして、今年も無事にもんじえ祭り、相生祭、
日光マウンテンランニング”、ミャンマープロジェクトを終えることができました。これらを通して、よりチームの団結ができ私個人では観察力やマネジメント力がついたと自負しています。今年度は残念ながら贈呈式に参加することができませんでしたが、チームから送ってもらった写真を見てこれまで活動してきたことへのやりがいや車椅子を送ることができた嬉しさを感じています。そして、4 年間この活動に参加することができて、様々な人と出会い、貴重な体験をさせて頂きました。相模女子大学のチームはもちろん関わったすべての人に感謝をしたいです。本当にありがとうございました。

一年間の感想文

英語文化コミュニケーション学科 3 年
金刺　珠里

車椅子の活動に参加して一年が経ち、この活動を通して人の温かみを感じながら自分も温かい気持ちを持って困っている方々の手助けをする活動にやりがいを感じることが出来ました。これまでの人生で車椅子に関わることはなく、困っている海外の方々のサポートを自分たちの力で手助けをする経験もなかったので、毎月の定例会や運営資金のための活動等がとても新鮮でした。この活動を通して、車椅子の整備から車椅子の使い方や仕組みについて学ぶことが出来ました。また、車椅子が身体の不自由な方々の生活の中で、どのような役割をするのか、車椅子があることの大切さを感じるとともに、身体の不自由ではない私たちがどれだけ恵まれた環境で生活しているのかを実感することが出来ました。定例会は羽村駅の近くで行っているため、住んでいる場所から遠い羽村駅まで通うのですが、その片道約 1000 円を超える交通費は、自分で生活費を稼ぎながら大学生活をしている私にとって負担でもありました。そのため、毎月の定例会に参加できなくなってしまった月が続いてしまうことがありましたが、少しでも貯金が出来たらまた参加したいと思っていました。その理由は、この活動を通して人の温かみを感じることが出来たからこそ、この活動にまた参加したいなと思うきっかけになったのではないかなと思いました。困っている人のために活動を続けるというこの活動で、何らかのやりがいを感じられるからこそ、続けられる理由の一つだと思いました。この活動を通して、車椅子を届けるという役割だけでなく、多く方々の力が一つとなって車椅子いう物に共通の気持ちを託して届けるという活動の存在価値の重要性を感じました。何かを一人でこなすことは限りがありますが、このように多くの方々と協力して一つのことを達成することは、自分たちが思うことよりも、大きなことを成し得ることが出来るということに気づくことが出来ました。今後も多くの方々と協力して活動をするとともに、今後の活動のために、自分はこの活動の中でどのような働きがけをすることが出来るのか探り、活動に活かせられる取り組みや私たちの気持ちを活動に参加していない多くの方々とも共有出来たらいいなと思いました。

子ども用車椅子を届けようプロジェクト報告書

英語文化コミュニケーション学科　2 年
篠原　瑞樹

昨年度からこのプロジェクトに参加して今年度で 2 年目となる活動でしたが、今年度も様々な経験をすることができました。

私は今年度から定例会では主に整備の仕事を行いました。昨年度は清掃と梱包を行っていたため整備の仕事を経験することがありませんでしたが、今年度から整備の仕事を体験したことで改めて日本から海外に送られる車椅子が、いかに海外の子どもたちのことを思って送られているのかを実感することができました。タイヤの整備に関しては、一本一本のタイヤの虫ゴムを新しいものに交換して更にはパンクを防止する充填剤を注入してからタイヤの空気を入れます。他にもブレーキの調整では、わずかなブレーキの効き具合にも注意してネジを調節することがあり、少しのネジの締め具合の差でもブレーキの効きが変わってくるため非常に難しく感じました。私が整備の仕事を通して最も驚いた作業が、頭や腰そして下半身のクッションの調節の作業です。クッションの形が特殊で凹凸がある車椅子もありました。それは車椅子を使用する子どもたちが、それぞれの体勢を整えるためにその人に合ったクッションを特注で作るからだそうです。私はこのような工夫がされていることを初めて知り、実際そのような工夫がされた車椅子は整備の際に凹凸をナイフで削って無くしました。この時も海外にこれらの車椅子が送られた際に、子どもたちが使いやすいように滑らかな形のクッションに仕上げることを意識して作業しました。整備の仕事の中にも、車椅子一台一台に対する多くの工夫と思いやりが詰まっていることを感じました。これらの作業も、時に一人で取り掛かることができず、周りの方々にサポートをしていただきながら行うこともあったため、引き続き整備の仕事の勉強を積極的に行い、より良い状態で車椅子を海外の子どもたちに送れるようにしたいと思いました。

また、初めてバンニングの作業に参加させていただきました。丁寧に清掃、整備、梱包された車椅子や歩行器の重さを考慮した上で、フォークリフトでコンテナーに詰め込んでいる様子も見学させていただきました。ここでもやはり車椅子や歩行器を大切に扱い、強い衝撃を与えることなく現地まで届けようとするこだわりを感じました。

これらの新たな体験の中で、多くのことを学ぶことができたと思いました。また今年度は新入生の加入により、自ら作業を新入生に教える機会もありました。その際に私自身が改めて一つ一つの作業の大切さを確認することができたように感じました。定例会やバンニング以外には、今年度も昨年度に引き続き相生祭の担当として活動をさせていただきました。今年度は出店をする際の必要書類の作成や、材料調達などを先輩方や 1 年生たちと共に行いました。昨年度の経験を踏まえて情報共有をしたことで、スムーズに作業を進められたところもありましたが、結果として目標としていた売り上げを達成することができなかったので、改めて改善点を確認した上で計画的に作業を進め、来年こそは目標を達成できるように努力したいと思いました。

今年度の私自身の活動は、昨年度より積極的に活動することができたのではないかと感じました。しかし、やはりどの活動も先輩方に頼ってしまう部分が多かったのではないかと思います。1，2 年生の知らないところで先輩方が色々な場面で様々な方たちとの連絡やコミュニケーションを取って

くださっていたため、より良い活動ができたり、NPO の方々をはじめとする多くの方々との信頼関係も築けていたのではないかと感じます。今年は 3 年目の参加になり、いよいよ私たちの学年が中心となって活動を続けて行く必要があるかと思います。そこで今まで先輩方が築いてきた、NPO の方々やこのプロジェクトに携わってくださっている多くの方々との信頼関係を更に良いものにしていくと同時に、プロジェクトの活動も更に積極的に行えるようにしていこうと思います。

１年間の活動を通して

英語文化コミュニケーション学科　２年
杉山　真理

私は、１年間の活動を通してたくさんのことを学びました。

１つ目は、定例会です。私は、毎月の定例会で車椅子のリストを作成する作業を行っていました。その中で車椅子にはたくさんの種類があることや、使い方が様々であることを改めて知ることができました。2 つ目は、海外とのやりとりです。海外との直接のやりとりも経験させていただき、英語でやり取りすることの難しさを実感しましたがとてもやりがいのある仕事だと思いました。今後また、こういう機会をいただけたときは前回の経験を活かしていきたいと思います。

3 つ目は、いろいろな人とのコミュニケーションです。定例会に参加

することによって実際に車椅子を使用している子のお母さんからのお話や、私たちがまだ行ったことのない国への贈呈式の状況や、様々な年代の方とお話しすることができるので、学校では学べないことや言葉遣いなどを自然と身に着けられるようになりました。また、他の国の方とお話ししたりすることによって正しい日本語で話そうということや、少しでも英語で話そうということを心がけようと思いました。

今年は、ミャンマーへの贈呈式に参加することはできませんでしたが、勉強会を通してミャンマーの現状を知ることができました。去年は、カンボジアに実際に行ってみて思っていたものと実際とでは異なることも多かったので今年は勉強会でしか学ぶことができませんでしたが、実際の写真を見て子どもたちやその保護者さんたちの嬉しそうな笑顔をみて、今後もこの活動を続けていきたいと思いました。また、今年は参加できなかった日本で車椅子を使用している施設への訪問も、

今年度は参加していきたいです。

一年間の活動を通しての感想

日本語日本文学科　1年
山田　澪

高校生の時にこの「海外に子ども用車椅子を届けようプロジェクト」の存在をテレビで知り、大学生という当時の私にとって身近な人が海外の人達のために協力して活動しているということに感銘を受けました。私は兄が障害（知的障害）をもっていることから、昔から「障害」という言葉はずっと近くにあるものでした。そのため、もし何かしらの機会があれば、障害を持っている人達に少しでも貢献できるプロジェクトには参加したいとかねてから思っていたので、相模女子大学に入学してこのプロジェクトがあると知った時、すぐに参加しようと決めました。

この一年間の活動を通し、私は様々な新たなことを学べたと感じています。車椅子を贈呈する先の国についての調べ学習を通して学んだ海外の紛争。全く関係が無いのに戦争の被害者となり苦しむ人々は私の想像以上に大勢いて、特にどうして子ども達が、大人が勝手に引き起こした争いに巻き込まれなければならないのかと感じずにはいられませんでした。戦争は決してしてはならないと学んできて、このことで改めて戦争の残酷さを痛感し、私にできる精一杯のことをしていきたいと思えるきっかけにもなりました。

勉強会の発表で学んだ子ども用車椅子のことについて。まず、車椅子に子ども用があることに驚きました。成長が早い子どもに合わせて、子どもが大きくなるたび高価な車椅子を用意するのは大変なことだと考えることができ、このプロジェクトで海外の子ども達に車椅子を送ることでどれだけ家庭の経済が救われているのか、私が参加しようと決めたこのプロジェクトが有意義な活動をしているのかを良く学べた勉強会になりました。

更には相生祭と日光マラソン大会を通して学んだ、商売をするということの大変さ。出店する内容や売り上げ、利益を考えて物を揃えたり事前準備をするなど、一から全て自分達の手で作り上げた相生祭のブースは私に、商売をする時に考えなければならない全てのことを教えてくれました。物の用意や試作会は試行錯誤を繰り返し、大変でしたが、お金を手にした時の達成感や充実感、来店して下さったお客様のお顔を見ていると、とても嬉しく楽しい気持ちでいっぱいになりました。

このように、私はこの一年間で多岐に渡る貴重な知識を得ることができました。このプロジェクトに参加していなければ気付けなかった沢山のことを知った一年になったと思います。

しかし、個人的な反省として、他団体の活動等もあったことから、普段のミーティングや定例会、お祭り等の行事にあまり参加できなかったということがあります。全てが初めての経験で分からないことが多く、頼もしく先導して下さった先輩方に頼りっぱなしになってしまった場面が多々ありました。分からないからといって受け身になり消極的にならず、もっと積極的に自ら関われていけたら良かったと思っています。自分がこのプロジェクトに参加して本当にやりたかったことを見つめ直し、来年度は今年度以上にあらゆる企画において積極的に関わろうと思います。また新たに一年生が入ってくると思うので、今度は自分が導いていく立場になるのだということを意識して、気を引き締めてしっかり関わっていこうと思います。

海外に子ども用車椅子を届けようプロジェクトに参加して

学部英語文化コミュニケーション学科　１年
河野　日和

私は、高校生のころは部活動には所属せず、アルバイトと遊びに明け暮れていて、ボランティア活動のような社会に貢献し、人とのつながりを得て、知見が広がるような活動をしてきませんでした。大学入学を機に、今まで何もしてこなかった自分を変えたいと思い、相模女子大学が提案する多くのボランティア活動の中から、一番興味を惹かれたこのプロジェクトに参加することを決めました。

初めて定例会に参加したとき、見慣れない形の車椅子が多くあることに驚きました。海外に子ども用車椅子を送る会のホームページを見たり、会の方のお話を聞いていくうちに、海外の発展途上国に住む障害を持った子どもたちは、車椅子がなければ両親が働きに出てしまうと１日中ベッドに寝たきりで過ごし、日の光を浴びることすらできないというケースがあることを知りました。普段私たちが何気なく目にしていた車椅子は、発展途上国ではまったく足りていないという現実を知り、ショックを受けました。私が入学する以前に、さまざまな国々を訪れたプロジェクトの先輩方と一緒に写った障害のある子どもたちの写真を見て、この子どもたちが笑顔で暮らせるための手助けをしたいという思いが深まりました。定例会で実際に車椅子の掃除や整備、梱包を行うことで、自分が発展途上国に住む障害を持った子どもたちのために何ができるか、どのような心持ちでこの活動に取り組めばいいかが明確に分かりました。定例会では、私たち相模女子大学のプロジェクトメンバーだけではなく、海外に子ども用車椅子を届ける会のメンバーの方々はもちろん、ベトナムやエチオピア、ネパールなど国籍を超えた多くの人たちが参加しています。このプロジェクトに関するお話のほかに、これからの将来のお話など、普段は聞くことができない視点からのお話を聞くことができて、自分の視点を広げることができました。私は事情があってミャンマー訪問には参加できませんでしたが、来年は、この１年プロジェクトを通して得られたものを胸に、実際に私たちが整備した車椅子を使っている子どもたちのもとに訪問したいです。

１年間の活動と通して

英語文化コミュニケーション学科　１年
神戸　悠

私は他の方よりも参加させていただいたのが遅く、夏休みからの参加でした。入学前からこの活動については認知していましたが、実際にこのプロジェクトに参加させていただき、想像していたよりも遥かに学生中心となり活動している会支えている先輩の方々の責任感のある行動のひとつひとつに驚嘆しました。

毎月の定例会では沢山の方々に会いしましたが、沢山の刺激を受けて多くの事を学びました。定例会には国籍関係なく色々な国の方が参加しており、それまでは外国の方との関わりは学校の教師の方くらいだったので世界が急に広がった感触がしました。まだまだ知識の少ない私にも活動について「ありがとう」と言ってくださる方が居ましたが、同時に、この言葉は私ではなく、以前までの先輩の方々がしてこられた活動へ向けられた感謝の言葉だと痛感しました。最初は小さな興味から活動へ参加しましたが、私たちのような学生や、活動へ関わっている全ての人たちの一人一人の努力や意志が重なって国境を越えて沢山の子供たちを救い、笑顔にすることが出来ると毎回の定例会を通して感じる事が出来ました。言葉が通じなくても共通の作業をすることや食事を共にすることで、一緒に活動している外国の方とコミュニケーションを取れる事も嬉しかったです。定例会には障害を持つ、ある一人の少女とその保護者の方が来てくれたことが何度かありましたが、まだ海外には実際に行ったことが無く今まで定例会とミーティングの活動のみだったので「あ、こういう子たちのために私たちは活動しているんだ。」と実際に触れあえたことで、とても刺激を受けました。その方々を通じて、別の NPO 法人の活動を見る機会を頂きましたが、また自分たちのものとは違った目的で活動している方々を見て、私たちだからこそ出来る事や感じる事の出来るやりがいがあると分かりました。

また、活動の根本的な始まりのきっかけや歴史など、今の活動を取り組むだけでなく以前の事も勉強する機会もあり、発展途上国の子供たちにとって、車いす１台の価値がどれだけ大きいものか知り、日本では保険などの影響でどれだけの数の子供用車いすが使用後に簡単に破棄されていてしまっているかを知り衝撃を覚えました。この会のメンバーの一人として、私自身も小さなことでもお力添えできるように知識を蓄え行動しなくてはならないなと身が引き締まる思いでした。

この活動を通して先輩方のお姿を間近で拝見させていただき、私はまだまだ未熟である事を痛感する事が多々ありました。計画から実行して最後の振り返りまで、自分の役割をしっかりと責任を持ち行動している先輩方はとても背中が大きく感じるものがあります。何年後かに自分もこんな風になれるのか不安になりもしましたが、この会は参加して一つ一つをこなしていき、沢山の人と触れ合うことで一人の人間としても成長できる貴重な場所だと強く思います。私もこの活動に参加する一員として微力ではありますが尽力していけるように来年度も頑張ります。

１年間の活動を通して

英語文化コミュニケーション学科　１年
鎌田　舞

この１年間の活動を通して、私はこのボランティアサークルで多くのことを経験し、学ぶことができました。

１つ目は、このサークルの活動実績です。このサークルに入部したとき、ボランティアサークルとしてこんなに活動的なのサークルは、この大学だけではないのかなと感じました。毎年アジアの発展途上国へ車いすを届けているのはすごいなと思いました。部員とボランティアの人たちだけで車いすの修理から梱包まで自分たちの手で丁寧に行い、現地へのアポイントメントをはじめ、現地の病院や子供たちの家に訪問していることにとても驚きました。これまでの活動報告書を読んで、日本製の中古の車いすで、多くの子供たちの生活を少しでも楽にする手助けになっていることが実感できました。２つ目は、これまでの訪問先であるアジアの発展途上国の現状です。カンボジア、タイ、ミャンマーなどのアジアの発展途上国では、病院にも行けず、自分の体に合う車いすを買えずに寝たきりの生活を送って苦しんでいる子どもたちが多いことにも、とても驚きました。また、その現地の国での貧国格差の現状にも知ることができました。現地の中での格差があるのには、政治的で経済的な背景があるからだとわかり、これが発展途上国の現状なのだと改めて感じました。３つ目は、サークルの活動量です。月一の定例会の中で中古の車いすを修理から梱包を行い、月一の活動で６０台以上の車いすを修理から梱包まで行っているのに活動的なサークルだと思いました。毎年の訪問先に、１００台近く、それ以上の中古を含めた車いすを送っていることが、きちんとした実績として反映されて、各訪問先で信頼されているのだとわかりました。

この１年間の活動をふまえて、自分がこのボランティアサークルに入り、自分の活動が現地で車いすを必要としている子どもたちのために少しでも携われていることに、ととてもありがたみを得ました。このサークルでの活動が在学生だけでなく、もっと多くの人にこのボランティアサークルを知ってもらいたいと強く思いました。今年の一年間を振り返って、このボランティア活動をどうしたらよりよくできるか、どうしたらこの活動を多くの人に知ってもらえるかなど、自分からのアイディアを出して実行したいとと思います。また、今年のサークルでの目標や自分たちがやらなければならないことを見つけていきたいと思います。目標と課題を見つけて、今後の活動にしっかり活かせるようにしていきたいと思います。今年は現地へ訪問し、毎日の生活に苦しんでいる子どもたちに自分の手で車いすを届けたいです。

一年間の活動を通して

英語文化コミュニケーション学科　１年
北村　実久

　この一年間を通して、こども用車椅子を海外に届けよう！プロジェクトで様々な行事に参加しました。去年の７月に初めて定例会に参加しました。全てにおいて、初めての事ばかりで車椅子の清掃や梱包がとても大変でした。しかし、分からないことは先輩、ボランティアの先輩方や色々な国の方達から優しく教えてもらったおかげで楽しくボランティア活動ができたと思います。そして次に、もんじぇ祭りに参加しました。そこでは、ただ資金を稼ぐだけではなく、お祭りに来ているお客さんに一人でも多くこのボランティア活動について知ってもらう事の大切さを学びました。お祭りでは、初めてビラを配ったり屋台で食べ物を売る作業をしました。カキ氷を作っている時や休憩時間には他の学部の１年生と話す機会があり、ボランティアを通して友達ができたことはとても嬉しかったです。また先輩とも沢山話す機会があり、少しでも先輩と交流できたことも嬉しかったです。相生祭にはEnglishクラブに参加してしまったので当日参加することはできなかったのですが、準備の期間に相生祭で飾る“ボランティアについて”とクイズをグループに分かれて書きました。相生祭に来る人たちに少しでもわかりやすい様に色を分けたり、見やすい様に字を綺麗に書きました。再来年は、さらに自分たちのオリジナリティーで工夫して作ろうと思いました。最近では、ミャンマーへの準備としてタオルを集めている内容のポスターを製作しました。タオルが予想以上に集まったのでミャンマーの方達が喜んでくれたら嬉しいです。今年はミャンマーへ行くことができなかったけれど、留学を終えて帰ってきたら自ら、その国へ行って海外のこども達に車椅子を届けたいです。

海外に子供用車椅子を届けよう！プロジェクトに参加して

英語文化コミュニケーション学科　１年
高村　春那

昨年６月から、私は海外に子供用車椅子を届けよう！プロジェクトに参加しました。きっかけは先輩方のプレゼン発表でした。この相模女子大学でそのような会が存在していること自体を知らなかった私は大変感銘を受けました。ボランティアというものをそもそも今まで積極的にやってこなかった私はなんとなく面倒くさそう、大変そうというイメージしかありませんでしたが、ボランティアの目的と趣旨を理解することで、自発的に自分も力になりたい！と強く思い、参加を決めました。この大学に入学するまではボランティアは学校全体で、何の目的で行うのかわからないまま参加させられるものでしたが、自分で理解して行動するとこんなにも達成感のある活動だと心から感じることができました。会のみなさんが大学に足を運んでくださり、会のことを詳しく教えてくださったときも、改めて自分はこんなにすごいプロジェクトの一員として活動しているんだと感じてもっと頑張りたいと思うようになりました。ただ車椅子を綺麗にしたり包んだりするだけではなく、その国籍の方と一緒に作業したり実際に届けた先の子どもたちの写真や感想も実際に目にしたりできて楽しむこともできました。今年度、私は現地に行くことは叶いませんでしたが、相生祭で活動資金を稼ぐという目的で働くことも苦ではありませんでした。夏の暑い時期や冬の寒い時期に朝早く起きてボランティアに向かうというのは一見してとても楽なことではありません。月１回でもそれを継続して行うことができたという事実は面倒くさがりやな私にとってとても大きな成長でした。一年間ありがとうございました。来年度もがんばります。

National
Rehabilitation
Hospital

Yankin
Children
Hospital

贈呈式
プレゼンテーション

AAR
japan

CHILDREN
WHEELCHAIRS
PROJECT

ViewSonic
AAR Japan

CHILDREN

Myanmar Project

観光